

高齢者向けパソコン教室の設計と 運営による実践的教育

後藤 正幸 中村 雅子 倉田 宏子 田中 愛子

地域に開かれた大学の重要性が聞かれるようになり、様々な取り組みが報告されるようになっている。武蔵工業大学・環境情報学部においても、学部キャンパスの位置する横浜市や都筑区に根ざした取り組みが進められている。そのような中、本学部の豊富な情報インフラを地域貢献にも活用しつつ、本学部の学生に対する教育の場を提供することを目的として、東山田地域ケアプラザと協力し「高齢者向けパソコン教室」を設計・実施した。本稿では、この取り組みの目的と設計プロセス、実施プロセスを紹介するとともに、このプロジェクトによって参加学生や受講生である高齢者、地域ボランティア、そして大学と地域ケアプラザの各々にとって、どのようなベネフィットが生まれたかについて論じる。

キーワード：高齢者向けパソコン教室、地域貢献、学生ボランティア、情報教育

1 はじめに

本稿では、学生の主導によって計画し、実施された「高齢者向けパソコン教室」が与えた教育効果について論じる。地域に開かれた大学の重要性が聞かれるようになり、様々な取り組みが報告されるようになっている。武蔵工業大学・環境情報学部においても、学部キャンパスの位置する横浜市や都筑区に根ざした取り組みが進められてきた[1]。そのような中、本学部の豊富な情報インフラを地域貢献にも活用しつつ、本学部の学生に対して教育の場を提供することを目的とし、東山田地域ケアプラザと協力して「高齢者向けパソコン教室」を設計・実施した。この教室は、本学部の学生ボランティアが中心となって、地域ボランティアと協力しつつカリキュラムを作り上げたものであり、単なる地域貢献という視点だけでなく、“教える”ことを通じた“学び”の場としても期待されている。本稿では、この取り組みの目的と設計プロセス、実施プロセスを紹介するとともに、このプロジェクトによって参加学生や受講生である高齢者、地域ボランティア、そして大学と地域ケアプラザの各々にとって、どのようなベネフィットが生まれたかについて論じる。

2 高齢者向けパソコン教室の経緯

情報技術が急激に普及すると共に、世の中にはデジタルデバイドの問題が取り立たされるようになった。とくに実践的な学習の場が乏しい高齢者にとっては、パソコン利用に対する要求は高まっているものの、利用のきっかけの欠如や操作の難解さが壁となっている[2]、[3]。そこでパソコン利用に対する支援として、NPO 団体や社会福祉法人が高齢者向けのパソコン教室を開催するなどの取り組みが活発になってきている[3]～[8]。このようなパソコン教室は、単に情報技術の恩恵を受けるための術を伝えるためだけでなく、地域活動への参加を促進し、介護予防につながる取り組みとしても期待されている。横浜市都筑区においても、高齢者支援と地域交流の一環として、“地域ケアプラザ”でコンピュータ講習会が行われている。しかし、予算や設備機器、人的リソース等の問題があり、継続的な実施ができていない施設もあるのが現状である。

“社会福祉法人横浜やまびこの里東山田地域ケアプラザ”は、地域での福祉保健活動や交流の拠点として、様々なサービスや活動を提供している。東山田地域ケアプラザでも従来高齢者向けのパソコン教室を開催した期間があり、多数の参加希望者があった。しかし、最近ではコンピュータ機材等の問題があり、教室運営を継続できていなかった。一方で、高齢者からのパソコン教室継続への需要が高まっており、地域交流の一環としても、その再開が望まれていた。

一方、武蔵工業大学環境情報学部は、高度な情報ネットワークインフラを備えた最先端の設備を持ち、学生の情報教育にも力を入れている。また、大学に所属する学

GOTO Masayuki

武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科助教授

NAKAMURA Masako

武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科助教授

KURATA Hiroko

東山田地域ケアプラザ

TANAKA Aiko

武蔵工業大学環境情報学部情報メディア学科

2005年度卒業生

生の中には、環境情報学部という性格上、コンピュータの基礎技術に興味を持つだけでなく、地域環境や社会環境の中での情報技術活用といったテーマに興味を持つ学生も多い。大学に設置されたコンピュータとネットワークインフラを活用し、高齢者向けにパソコン教室を運営するというプロジェクト自体を学生主体で実施できれば、これは環境情報学部の学生にとっても多大な学びの機会となりえると考えられた。このような経緯から、武蔵工業大学環境情報学部と東山田地域ケアプラザが協力し、双方にとってメリットのある取り組みとして「高齢者向けパソコン教室」の設計と実施を、学生主体で取り組むこととなった。

3 高齢者向けパソコン教室の意義

今回実施した「高齢者向けパソコン教室」には、武蔵工業大学の教職員と警備員、東山田地域ケアプラザ、受講生である高齢者、サポートを頂いた地域ボランティアの方々、アシスタント参加した学生ボランティアと複数の見方の異なるコミュニティの協力によって実現したものである。したがって、これらの考え方や参加目的、知識レベルの異なる人々の“それぞれの視点”から、その意義を論じる必要がある。そこで、この高齢者パソコン教室を実施するまでに1年以上の時間をかけて、関係者で議論を行ってきた。これは、大学とは視点の異なる地域ケアプラザや地域ボランティアの人々の要望を正しく掴み、全プレーヤーにとってベネフィットのあるパソコン教室を開催するべきであるという考えに基づくものである。

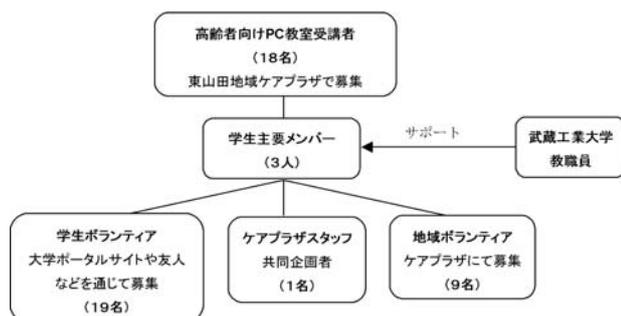


図1 高齢者パソコン教室の関係コミュニティ

ここではまず、地域貢献型プロジェクトの一般的な意義について概略を述べた後、これらの準備活動を通じて明らかとなった「高齢者パソコン教室」の意義についてまとめる。

3.1 地域貢献型プロジェクトの意義

日本の教育機関が地域に開かれたものであることの重要性が指摘されている。日本教育工学振興会によれば、「学校を開く」とは、① 学校教育に地域の教育力を生かす、② 家庭や地域社会の支援を積極的に受け入れる、③ 学校を地域に開放する、④ 学校を地域社会とともに子どもたちを育てる場とする、ことであるとされている。大学が地域貢献を通じて一般社会の人々にベネフィットを提供することは、地域に根ざした大学としての評価を向上させると共に、学生の教育機会という点からも意義深いと考えられる[1]。すなわち、大学が地域に開かれた形態を取り、地域貢献を軸にした事業を展開することは、大学側に取っても“地域の教育力を学生教育にも生かす場を得るチャンス”となりえる。地域貢献型のプロジェクトにより、これまで大学生があまり関わることがなかった人々とのコミュニティが生まれ、一つの社会関係が形成される。様々な学問を机上で勉強するだけでなく、このような社会関係の中に身をおく事によって様々な考え方を学び、自ら行動する強い力を得ることができよう。

3.2 参加学生への教育効果：ボランティア参加による学び

この高齢者向けパソコン教室は、もともと武蔵工業大学環境情報学部学に所属する学生2名の卒業研究テーマとして出発した[9],[10]。これら2名の学生を含めた3名の学生が中心メンバーとなり、高齢者の学びのプロセスやプロジェクト全体のマネジメント法について、実践的な研究の場を得ることができる。さらに、高齢者とコミュニケーションを図りながら、同世代の学生ボランティアとの間に入り、教室の設計と運営に携わることで、多くの学びを得られる場と考えられる。

高齢者にパソコンを教えるということは、あらゆる意味で大学生や高校生の教育と異なる面を持つ。学生ボランティアとして毎回の教室の教師役やアシスタントを務めた学生にとっては、高齢者向けパソコン教室は、自身のもつ知識を“教える場”ではなく、高齢者と共に“学ぶ場”となる。もともと環境情報学部では、学生は次のような“教える機会”を持っていた。

- ①情報メディア学科には、教職課程を履修する学生も多数存在する。これらの学生は、教育実習を通じて、実際に高校生相手に教える場がある。
- ②学部全体の演習科目において、学生アシスタント制を採用しており、毎年優秀な学生が後輩の履修する授業にアシスタントとして参加し、教える場を持っている。
- ③環境情報学部では3年次より研究室配属の制度を採用し、事例研究と卒業研究の2年間において論文を完成させる。そのため、通常は4年次には同じ研究室

に後輩（3年生）が配属される。同じ研究室の後輩とは親密な関係が出来上がり、事例研究活動のあらゆる側面でサポートしたり、教えたりする場面がある。大学院生と学部生の関係も同様である。

このように、すでに“教える”という活動を通じて“学ぶ”というスタイルは、環境情報学部のあらゆる部分で根付いており、多大な教育効果を生む方法の一つである。しかしながら、“教える相手”については、自分と同じか年下の学生という点で共通していた。自身よりも人生経験のある目上の相手に教えるという作業は、同じ“教える”でも全く異なるベネフィットを生む。高齢者パソコン教室の受講者は、パソコン以外の面では人生経験豊かな先生役でもある。お互いのコミュニケーションを通じて、コンピュータ知識だけでなく、様々な知識、人との接し方、教え方の本質、感謝の気持ちや心の交流など、非常に多岐に渡ることを実践的に学ぶことができる[11]、[12]。

3.3 受講生と地域ボランティアのベネフィット：大学生とのコミュニケーションによる学び

これまで、パソコン教室で地域ボランティアとして活躍している人々の中には、主に仕事を定年退職した後の人生の活動場としてボランティア活動に参加している人も多い。このような地域ボランティアの人々は、ひとに何らかの貢献をすることで喜びを得て、また自身の活躍の場も得ていると考えられる。従来、高齢者が同じ高齢者からパソコンを学ぶことで、お互いにうまくコミュニケーションを図ることができ、教育効果が期待できると考えられていた。また、地域ボランティアも教えることで人や社会に貢献し、これを通じて自らの喜びを得られている。

本稿で示した高齢者向けパソコン教室は、大学生が高齢者にパソコンを教えるという新しい取り組みである。地域ボランティアにとっては受講生である高齢者に教える機会は日頃からあるが、逆に若い世代に色々と教えたり、交流をしたりする機会はあまり多くない。地域ボランティアの人々にとっても、大学生に「高齢者への教え方」を指導することで、日頃得ることのできない大学生とのコミュニケーションの場が生まれる。教室開催前のミーティング時から、若い学生と交流することを好意的に感じている意見を多く得られていた。一方で、地域ボランティアのノウハウは、高齢者を対象とした教室では非常に重要であり、様々なコメントや指導によって得られた知見も多大であった。結果的に、長期間をかけ、“高齢者にパソコンを教えるとはどういうことか”について地域ボランティアと共に議論し、学んだことが、今回の“高齢者向けパソコン教室プロジェクト”の成功を導いた要因の一つと考えられる。

3.4 地域ケアプラザからみたベネフィット

地域のケア施設には、「地域交流」という目的もある。日頃から、地域のボランティアや高齢者とのネットワーキングを行い、様々なイベントを開催することで、地域交流を促進している。パソコン教室の他にも、各種の文化を題材としたイベントを催すことで多数の地域住民の参加と交流を促している。しかし、一般的に地域交流の場に出てくるのは女性が多いという実情がある。その理由は明確ではないが、男性は退職後に仕事社会でのポジションを失うと、地域活動の中に自身を置くことが苦手な傾向があり、とくに企業などで精力的に活躍していた男性に多いようである。唯一、パソコン教室という題材は、多くの男性が参加してくる企画として期待が大きかった。

地域ケアプラザとしては、家庭にこもりがちな高齢者を地域活動に参加させ、これを機にケアプラザの活動にも参加を促すことで、質の高い生活や地域交流を促進したいという意図がある。すなわち、高齢者のパソコンスキルを向上させること自体が主目的ではなく、パソコン教室を通じた地域交流の促進を念頭においているのである。

このような中、地域の大学が主体となってパソコン教室を実施することは、これまでなかった新たな参加者を取り込む可能性が広がるというメリットがある。また、日頃は大学の建物内に足を運ぶ機会の少ない地域住民にとっては、大学は興味深く、新鮮な対象である。地域のケア施設の企画としては、地域住民に“大学生活の一部を体感する場”という新たな側面を提供できるというメリットもある。

4 高齢者向けパソコン教室の設計と実施

4.1 準備：目的と方向性の明確化

パソコン教室の目的と方向性を明確化するために、地域ボランティアとケアプラザスタッフと共に徹底的なミーティングを実施した。その結果、初心者である高齢者はパソコンに対する恐怖心や苦手意識がとても強く、若い世代に教える場合とは全くことなる点に注意する必要があることがわかった（高齢者のパソコン操作に関する研究では、例えば[13]、[14]がある）。高齢者に適したパソコン教室を設計するためには、高齢者のパソコンに対する反応や学びのプロセスについて十分理解しなければならぬ。そのため、高齢者へのパソコン指導経験のある地域ボランティアにフリーディスカッションしてもらい、高齢者という対象の理解に務めた。また、様々な見方の異なるメンバーが参加したため、当初は様々な意見が対立し、多くの異なる切り口のパソコン教室コンセプトが提案された。そこで教室のコンセプトや内容について

て合意形成を得るため、意見を反映した教室コンセプトと運営の方法を複数案作成し、次のミーティングにフィードバックして再度議論を行うことを4ヶ月間に渡り、計5回実施し、最終的には学生主導で意見集約を行った。

一方、ケアプラザスタッフの要望は、高齢者がパソコンに熱中しすぎることによる引きこもりを防止し、これをきっかけにケアプラザを訪問してもらい、地域交流の機会を創出したいというものであった。また、他のイベントでは通常は女性の参加者が多く、男性がなかなか出てきてくれないが、「パソコン」が対象である場合には多くの男性が教室に出てきてくれる傾向がある。このプロジェクトによって地域イベントに男性高齢者が出てきてくれば、それだけでも価値がある。

数回に渡るケアプラザスタッフと地域ボランティアとの検討会を実施した結果、今回の教室ではパソコン初心者を対象に、①パソコンに対する恐怖心をなくし、②参加者の交流（コミュニケーション）を促すこと、の2つを目的とする高齢者向けパソコン教室を設計することで合意形成がなされた。

4.2 カリキュラムの設計と教材製作

設計したカリキュラムを表1に示す。地域ボランティアと学生ボランティアの議論により、マウス操作だけのできる作業を前半に、通常は最初に学習する文字入力を後半に配置するカリキュラムとなった。交流を促す方法として、受講者を2人1組のグループに分け、各グループに学生アシスタント1人を配置することとした。このグループ単位で、何らかの作品を作り上げることで、グループ内の意見交換が促進され、担当アシスタントとの交流も深まると考えられる。最終的には、第3回目のデジタルカメラ撮影会で撮影した写真をもとに、グループで1つのポスターのようなものを成果物として作り上げ、グループ毎に発表することとした。教材は参加学生が各章を分担し、執筆中に地域ボランティアによる数回のチェックを受けながら、60ページからなる教本を書き上げ、参加者に製本版を配布した。

表1 カリキュラム

第1回	パソコンの基礎 マウス操作の練習（インターネット）
第2回	マウス操作の練習（ペイントソフト） ファイル・フォルダの管理
第3回	デジタルカメラ機能説明と撮影会
第4回	画像の取り込み、文字入力
第5回	文字入力
第6回	文字入力、発表の準備
第7回	作品発表会

4.3 教室の運営と継続的改善

実際の教室開催は、平成17年10月12日から11月2日までの水曜と土曜の週2回で実施した。受講生の募集については東山田地域ケアプラザの方で行い、「けあぷら通信」という地域への定期配布物への掲載などを行った。

また、実際の7回の教室運営では、より効果の高いパソコン教室を実施するために、以下の3つの方法を考え、実施している。

- 1) 地域ボランティアによる学生アシスタントのコーチング
- 2) 学習カルテを用いた学習状況の管理
- 3) 授業の改善PDCAサイクル

これらは文献[9]において提案し、評価を行っている。詳細はこちらを参照されたい。その中で、学習カルテについて、図2と図3に利用したカルテの一例を示す。

受講者用カルテ
第1回目

受講者氏名: _____
担当氏名: _____

1. 授業内容について
授業内容の理解度（3段階で表せない場合は、備考欄に記入）
A. すぐできる・理解できている B. 問題はかかるができる・だいたい理解している
C. やや難あり・あまり理解していない D. ほとんどできない・理解していない

1. パソコンの構造について理解できる	A	B	C	D
2. 電源の入れ方を理解できる	A	B	C	D
3. Windowsの用語を理解している	A	B	C	D
4. マウスを握ることができる	A	B	C	D
5. ポインタを動かすことができる	A	B	C	D
6. クリックできる	A	B	C	D
7. スタートからアクセサリに移動してペイントを立ち上げられる	A	B	C	D
8. マイドキュメントをダブルクリックで表示できる	A	B	C	D
9. ウィンドウの大きさを変えることができる	A	B	C	D

図2 受講者用パソコンカルテの例1

2. 授業全体について

1. 授業のスピードについていけているか	A	B	C	D
2. モニタを見ることができているか	A	B	C	D
3. 講師の言ったことを理解しているか	A	B	C	D

質問があった箇所・内容を具体的に記入：

なかなか理解できなかった箇所、どうやったら理解できたのかを記入：

図3 受講者用パソコンカルテの例2

この学習カルテは、受講生である高齢者に専属でつく学生アシスタントに配布され、教室の途中で、高齢者を観察しながら、パソコンのスキルや上達具合、困っていることなどを記入することで、課題を明らかにし、次の教室にフィードバックするためのものである。この学習カルテを採用したことにより、学習者の様子を正しく

モニタリングしながら、継続的に改善とコミュニケーションの促進を図ることができた。この学習カルテの評価についても、詳細は文献[9]を参照されたい。教室開催中は、地域ボランティアが学生ボランティアをフォローし、学生の“教え方”や“接し方”などについて同様のカルテを記入した。すなわち、高齢者とは担当学生アシスタントが対応をし、地域ボランティアが学生アシスタントにコーチすることで、参加者のそれぞれについて年齢差を越えたコミュニケーションが行なわれる仕組みになっている。

また、実際の授業の風景を図4、図5に示す。



図4 パソコン教室の実施風景
(教師役の学生が説明している様子)



図5 教室終了後のフィードバックミーティングの様子

5 高齢者パソコン教室の評価

5.1 学生ボランティアによる評価

高齢者向けパソコン教室に携わった学生の視点から高齢者向けパソコン教室を評価するため、参加した学生にインタビューと自由記述式のアンケートを実施した。インタビューは19名の参加学生に対して行い、自由記述式アンケートで得られた回答は10名であった。自由記述式

のアンケート結果については、詳細は最後の付録に示す。

その結果、今回のパソコン教室に参加した学生が、もっとも“学び”の多かったこととして、「教えることの難しさ」、「コミュニケーションの取り方」、「協働作業を通じて構築されるネットワークの価値」を感じていることがわかった。中には普段、大学の授業アシスタントとして学生に対して教えている学生もいたが、相手が高齢者に代わると、様々な面で違いを感じ、新たに学ぶことが多かったようである。また、リーダー役として携わった学生の一人は、「感謝の気持ちを表す意義」、「多くの人によく指示を与え、全体をマネジメントすることの難しさ」といった日頃なかなか学ぶことのできない貴重な経験を得たようである。何よりも、参加した学生それぞれがきちんとした自身の考えや意見を持ち、数多くの建設的な意見を出していた点は特筆に価すると思われる。

しかしながら、今回は初めてのプロジェクトということもあり、次のような点で課題もあげられた。

- 当初、学生ボランティアへは、テキストの作成補助と教室でのティーチングアシスタントをお願いすることを想定していた。しかし、多くの作業が教室開始の直前に必要となり、少数の主要メンバーだけで仕事をするにはオーバーワークとなってしまった。早めに学生ボランティアを募集し、うまく作業を割り振って効率的、かつ過負荷にならないように業務を定型化する必要がある。
- 毎回の連絡事項など、全員で意識の共有がなされていない場面があった。ボランティア間の情報ネットワークを確保しておく必要がある。学生ボランティア、地域ボランティア間でも情報共有ができる仕組みを整える必要がある。
- 早めに進めるべき作業があったが、これが実行段階で初めて明らかになり、直前に膨大な業務をこなさなければならない場面があった。
- 同じ担当グループ内では様々なコミュニケーションが行われたが、異なるグループ間でのコミュニケーションがあまり活発に行われなかった。コミュニケーションが円滑に行われた“高齢者(受講生)－学生ボランティア－地域ボランティア間”では、協働作業を通じて構築されたネットワークが重要な役割を演じている。

以上のように、いくつかの点でパソコン教室の運営方法について課題が明らかになったが、これらの課題自体についても、学生が主体となり、教室開催後にミーティングを行って議論の中から明らかにしていったものである。このような取り組みは、学生にとっては非常に貴重な学びの場であったと考えられる。協働作業によるネットワーク形成プロセスについては、文献[16]などにおいても学生視点から類似する興味深い事項が指摘されてお

り(注1), 継続的に調査し, ネットワーク形成のためのプロジェクトデザインも検討していくべきであると考え。また, このプロジェクトに研究の立場から参加した中心メンバーは, 実際に運営に参加して作り上げる作業と, これとは別に研究視点(第三者的な視点)からプロジェクトを調査・分析する作業の切り替えに苦慮したようである。この点については, プロジェクト進行時に適

切な指導が必要であろう。最後にパソコン教室を共に作り上げる過程を通じ, 学生同士の間に関係が芽生え, お互いに感謝の気持ちを持って教室を終了したことを付け加えておく。

5. 2 受講生(高齢者)へのアンケートによる評価

受講生として参加した高齢者による評価を行うため,

表2 受講生(高齢者)へのアンケート調査結果

	質問項目	回答平均値
教室全体について	このパソコン教室に参加してよかったですか。(総合的満足度)	2.00
	パソコン教室の構成(講義の時間, 休憩時間など)はバランスがとれていましたか.	1.80
	学生アシスタントの対応(校舎内の案内, 誘導)はどうでしたか.	2.00
	地域ボランティアの対応はどうでしたか.	1.87
	大学生主催によるPC教室にまた参加してみたいと思いますか.	2.00
	今後東山田ケアプラザによるフォローアップ(パソコン相談室)に参加してみたいと思いますか.	2.00
授業について	授業は理解できましたか.	1.87
	カリキュラム構成はどうでしたか.	1.69
	グループ作業はどうでしたか.	1.47
	大学生による講師はどうでしたか.	1.87
	テキストの内容はわかりやすかったですか?	1.86
学生アシスタントについて	学生アシスタントの教え方はどうでしたか.	2.00
	学生アシスタントとの交流は楽しかったですか.	2.00
	担当の学生アシスタントを固定したのはどうでしたか.	2.00
交流について	受講生同士の話は楽しかったですか	1.90
	本パソコン教室は, 単なるPC技術習得だけでなく, 交流を重視したコンセプトの教室でしたが, このようなコンセプトは良かったと思いますか.	1.80

表3 学生アシスタントに関する自由意見回答

学生アシスタントについて要望, または良かった点などの自由意見
<ul style="list-style-type: none"> ・ 120%満足! ・ 親切でうれしかった ・ 学生さんの熱心さには感銘を受けました。 ・ 一人一人親切に対応していただきありがとうございました。 ・ みなさんが非常に親切でした。 ・ レベルに合わせた指導ありがとうございました。 ・ 教えてくれる学生さんがとても素敵で笑顔が最高。又是非お願いします。 ・ 補修を含め大変親切に教えていただき感謝しています。 ・ これほど詳しく教わった事がなかったので大変喜んでおります ・ とてもすばらしい人格の持ち主でした。これからも研鑽をつまれ立派な人生を送られることを念じております。 ・ 会社や自宅で娘や妻にきいても, 覚えが悪く, いやがられ, 少しパソコンが嫌いになりましたが, 親切に教えてもらい, また好きになりました。 ・ 多数いて喜ばしい。 ・ 前回の復習でできなかった事(自分のカメラから移す作業)次回早く来て, とてもよく教えていただけました。皆様が大変な努力, 作業でこの講座をしてくださったことと, 気遣いが大変行き届いていて, 深く感謝しております。 ・ 実に熱心にしかも教えすぎず自主性と力を身につけてくれた。 ・ 毎回の自己紹介は煩わしいと思う。人名のリストアップ, 構成を事前に配布していただければよかった。

最終授業の終了直後にアンケート調査を行った。それぞれの項目に対し、“とても良かった”を+2点、“まあまあ良かった”を+1点、“普通”を0点、“あまり良くなかった”を-1点、“良くなかった”を-2点の5段階評価のSD法により評価してもらった。表2に得られた17名の有効回答について、全回答の平均値を示す。

表2の結果から明らかなように、全般的に受講生である高齢者の評価は高かった。とくに、学生アシスタントに関する項目は3つの質問全てで全員が満点の+2点をつけており、大学生とのコミュニケーションは高齢者にとって非常に満足度が高いものであることが分かる。この“学生アシスタント”について自由意見を求めたところ、表3のような回答が得られた。

多くの意見によって、今回のパソコン教室に携わった学生アシスタントに対して多大な感謝と期待の聲が寄せられていることが分かる。このプロジェクトにおいて、大学生が高齢者と交流することのメリットは十分得られたものと考えられる。IT化社会における高齢者の社会参加のあり方について議論があるが[15]、高齢者にとって、若い世代である大学生とのコミュニケーションのベネフィットは非常に大きいといえる。

大学の地域貢献が叫ばれる中、大学教員を中心とした研究者による研究活動も重要であるが、大学生というリソースを最大限に活用して、地域住民に多大なベネフィットを与えることも可能である。学生主体のプロジェクトが地域貢献につながり、ひいては大学の評価へも影響を与えることが容易に想像できる。

6 考察

大学生が高齢者にパソコンを教えるというプロセスは、大学生と高齢者の双方にとって多大なメリットが期待できる。今回の準備段階から地域と連携して高齢者パソコン教室の設計を行い、実際に実施と評価を通じて明らかになった点をまとめると次のようになる。

(1) 学生ボランティア視点の評価

高齢者とのコミュニケーションにより、通常の授業等では得られない学びがあった。また、今回は運営面でいくつかのプロジェクトマネジメント手法を援用した方法を導入しており[9]、プロジェクトの運営方法という面でも実践的な学びがあった。高齢者に“教える場”という実践は、多大に“学ぶ場”であったといえる(注2)。

(2) 受講生(高齢者)視点の評価

前章のアンケート結果でも示された通り、大学生が教えるパソコン教室の満足度は非常に高く、今後の継続開催を望む声が多く寄せられた。教室開催前と教室開催後のパソコンや交流に対するイ

メージについても大きな改善効果がみられた(詳細な分析は、文献[9]を参照のこと)。

(3) 地域ボランティア視点の評価

日頃接することの少ない大学生にコーチングしながらパソコン教室をサポートすることで、これまでの高齢者への指導とは異なるベネフィットが得られた。地域ボランティアの人々には、定年退職後に地域で活躍している人が多い。大学生世代の若者に教えるという経験は、これらの地域ボランティアにとっても大きなモチベーション向上の場となったといえる。

(4) 地域ケア施設視点の評価

今回の高齢者向けパソコン教室では、これまでの地域交流活動に参加していなかった新しいメンバーが多数参加した。この点は地域ケア施設側にとって大変喜ばしいことであった。また、教室終了後は東山田ケアプラザに常設のパソコン相談室を設置し、受講者がケアプラザへ足を運びきっかけを与えた。この取り組みは他のケア施設とも話題となり、「このような大学での教室は、1地区のみでの開催はもったいないので、次年度は複数のケアプラザと合同で拡大開催したらどうか」という意見も頂いている。

(5) 大学教員視点の評価

今回のプロジェクトにあたっては、けあぶら通信といった地域社会の情報網を利用して、武蔵工業大学・環境情報学部の取り組みが多く地域住民に伝えられた。また、受講者からは本学の学生の熱心さや誠実さに対して高い評価を受け、地域に貢献するという目的を達成した。それと共に、参加した学生に対して、プロジェクトの設計と運営、そして“高齢者へ教える”という実践を通じて、通常の授業だけでは教えられない多大な教育効果が認められた。

以上のように、学生にとっては、自身よりもかなり年上の高齢者とコミュニケーションを図ることで、貴重な体験とともに多くの学びがあったといえる。また、参加した高齢者からは、学生に向けて多数の感謝の聲が聞かれた。地域の高齢者にとっても、日頃あまり交流を持つことのない大学生との取り組みはたいへん貴重な体験になったようである。参加者からは、「私の町にこのような素晴らしい大学があり、このように素敵な学生さんが学んでいるとは知らなかった」、「是非、うちの孫にこの大学を勧めたい」といった声も聞くことができた。“年齢の壁を越えたコミュニケーションを重視する”という今回のパソコン教室のコンセプトに値する結果は十分得られたと考えられる。

しかしながら、参加した学生は非常に高いモチベーションを持って加わったものの、その運営に関わる負荷は非常に大きく、オーバーワークとなった場面もしばしば見られた。学生に対するサポートレベルを適切に見極める必要がある。また、意識の高い学生はボランティアとして多数参加してくれたものの、その数は20名あまりであり、一部は著者の研究室メンバーで占められていた。このような活動は実際に参加してみないとその良さが実感できず、日頃学業などで多忙な生活を送る学生からはしばしば敬遠されることがある。より多数の学生に参加してもらい、この経験を学びの場としてもらうための方策を考える必要がある。

7 まとめ

本稿では、武蔵工業大学環境情報学部と東山田地域ケアプラザの共同で開催した「高齢者向けパソコン教室」の概要について述べ、その効果について考察を行った。初年度の取り組みとしては、参加した学生ボランティアの努力の甲斐があり、本プロジェクトを成功に導くことができた。

継続性のあるプロジェクトとして発展させるためには、フィードバックすべき課題について十分検討し、実施を通じたノウハウを次年度以降に生かすことが必要である。社会的には、高齢者の尊厳のある生活、QOL (Quality of Life) の高い生活が望まれており、高齢者パソコン教室を題材とした地域連携型教育のあり方をさらに洗練していくべきである。一方で、文献[17]に一例を示すように、高齢者に優しい情報システムの研究も日進月歩であり、このような広い観点の研究を統合していくことは今後の課題である。この高齢者向けパソコン教室プロジェクトは、今後も継続して実施する予定であり、今後の発展が期待される。

謝辞

本稿の取り組みは、半年以上の準備期間を経て、著者の一人である武蔵工業大学・環境情報学部の田中愛子の他、大場啓司君、吉村友佑君が学生の中心となって、パソコン教室のカリキュラム設計と運営全般を担って頂きました。また、20名近い学生が呼びかけに応じ、学生アシスタントとして今回のボランティア活動に参加してくれました。参加した学生の皆さんの尽力なくして、このプロジェクトの成功はありませんでした。また、池田裕治さん、宮村佳菜枝さんを始めとする多くの地域ボランティアの方々に、今回の学生の活動を支援して頂きました。ここにそのご協力に敬意を表すると共に深く感謝致します。

注

注1 例えば、文献[16]、P. 57 において次のように述べられている。

“グループに所属せずに撮影係りをやっても、各班を行き来できるため、全員とコミュニケーションをとることができる。しかし特定のグループとネットワークをもっているわけではないので、作業をせずに撮影をすることにためらいが生じる。(中略)「作業もしていないのに何しているんだという感じも受けたので積極的に動けなかった。」”

単に会話をするチャンスがあるだけでは必ずしも円滑なコミュニケーションが行われるわけではないことが伺える。

注2 同様の考察は、文献[16]でもなされている。地域貢献の場が、逆に教職員や学生にとって多大な学びの場となることは、高齢者パソコン教室に限ったことではない。

参考文献

- [1] 中村雅子：“多様なアクターを結びつけ、新たなコミュニティを生成する装置としての「ネットデイ」”，武蔵工業大学 環境情報学部 情報メディアセンタージャーナル, Vol. 6, pp. 46-53, (2005)
- [2] 総務省：「高齢者・障害者の情報通信利用を促進する非営利活動の支援等に関する研究会」報告書, http://www.soumu.go.jp/joho_tsusin/policyreports/chousa/barrier_free/010530_3-2.html, (2001)
- [3] 宮城県シニア世代パソコン活用支援事業実施調査報告書, <http://www.pref.miyagi.jp/Jyoho/material/reports/senior/>, (2002)
- [4] 伊賀市社会福祉協議会：高齢者パソコン教室, <http://www.hanzou.or.jp/ikigai/sakuhin.htm>
- [5] 北海道郵政局：郵便局の「高齢者等パソコン教室」, <http://www.japanpost.jp/pressrelease/s01/200107/010705.html>
- [6] (財) 健やか奈良支援財団地域ささえあいカンパニー採択事業平成16年度、POAY パソコン教室：http://www.nenrin.or.jp/nara/sasaeai/03_7.htm, (2005)
- [7] SeniorNet Japan (シニアネット ジャパン), <http://www.senior-net.jp/index.asp>

- [8] 関西 RP (Retired Person) の会,
http://homepage3.nifty.com/ksrp/
- [9] 田中愛子：“高齢者パソコン教室の設計と評価”，平成 17 年度武蔵工業大学環境情報学部卒業論文，(2005)
- [10] 大場啓司：“大学生のボランティア参加と継続を支援するボランティアマネジメントの提案”，平成 17 年度武蔵工業大学環境情報学部卒業論文，(2005)
- [11] 大坊郁夫・奥田秀宇編：親密な対人関係の科学，誠信書房，(1996)
- [12] 星野命編：対人関係の心理学，日本評論社，(1998)
- [13] 板倉英里：“高齢者のマウス操作に関する研究 ～マウス体操のデータ分析から第 2 マウス体操の開発～”，園田学園女子大学・情報コミュニケーション学科 卒業論文，(2005)
- [14] 森 純子：“高齢者のパソコン操作におけるつまずきについて ～マウス体操の開発とその評価～”，SONODA 情報コミュニケーション，Vol.1, pp. 185-195, (2002)
- [15] 市口精一郎，桑田敬治，宮田 健，他：IT 社会で高齢者の暮らし方 ～高齢者のコミュニケーション・地域メールネットの実験～，豊中市立生活情報センターくらしかん刊行，(2002)
http://www.hcn.zaq.ne.jp/noroken/homepage/elderB.html
- [16] 武蔵工業大学環境情報学部・中村 SR 研究室：牛久保小ネットデイプロジェクト報告書，(2005)
- [17] 赤津裕子，三樹弘之：“高齢者にとっての使いやすさ研究”，沖テクニカルレビュー第 199 号，Vol.1, 71, No. 3, pp. 54-57, (2004)

付録

学生ボランティアとして参加した学生に対する自由記述式のアンケートの質問項目と回答（抜粋）を以下に示す。

- ①今回のパソコン教室の運営側に参加して，新たな学びがあったか。あるとすれば，どのようなことか。
(学生の回答)
 - ・人を教えるのはとても大変であることが分かりました。教えるのって難しいなあ，とつくづく実感しました。
 - ・コミュニケーションの面で，学んだことは多いと思います。
 - ・プロジェクトを動かすことは，かなり大変だなと実感しました。
 - ・実際に高齢者の方々と接してみて，これからの社会

にパソコンが欠かせないことが分かりました。また，自分自身パソコンが全く出来ない決め付けていましたが，お年寄りの方々にボランティアとして，教える側として必要としてもらったことが，自分にとってこれからの勉強のいい励みになりました。

- ・人に物を教える大変さ・面白さがわかりました。
- ・カルテを作って，教室運営を良くする方法を学びました。
- ・何かを運営するという側に周ったことが初めてで，特に学生室でのみんなの様子からその大変さがわかりました。
- ・このプロジェクトで一番学んだことは，リーダーとしてあるべき姿でした。そして，人を動かすマネジメントの部分でも学ぶことが多かったです。

②教員側のサポートについては適度であったか（やり過ぎ，足りない点など）。こういう点はもっとサポートしてほしい，こういう点をもっと学生主体でやりたいなどの意見
(学生の回答)

- ・教員にはサポートして頂き，学生たちをメインとしてほしいです。
- ・客観的に見ていて，教員側のサポートは良かったと思います。設計段階のミーティングには先生も参加し，運営は学生がする。なかなか良いスタイルであると思いました。
- ・適度だったと思います。全体的に学生主体でやっていたと思います。
- ・PC 教室自体の問題としては，駐車場の件が毎回問題があったので，車で来る方に事前にプレートを配るくらいに警備員さんと話をしていただければよかったです。講習自体は，学生でもなんとか対処できていたので，先生のサポートは充分だったと思います。

③今回，参加して不満に感じたことはあったか。あったとすれば，どんな点だったか。

- (学生の回答)
- ・教室当日の深夜や明け方などによく連絡や確認のメールが来た。内容についても携帯と PC の両方に同じ内容のメールが届いたり，全く違う内容のものが届いたりした。
 - ・講師役からすれば，週二回は結構ハイペースです。ただ，このハイペースの勢いだからこそ乗り切れたという話も出ていました。
 - ・準備の段取りが悪いところがあった。前もって準備できることは，先にやっておいた方がいいと思う。
 - ・不満に感じたことは一つもありませんでした。どれ

もいい経験ばかりでした。なかなか高齢者と接する機会がないので、楽しくて時間があっという間に過ぎていきました。

- ・水・土の週2回開催だと中枢スタッフの負担が大きすぎると思います。一日のほとんどの時間を準備につき込んで、なおかつ週数回は徹夜していた状況ですから。今回、中枢スタッフが3人いてこの状況だったことを考えると来年以降もこのスケジュールで開催するのは危険だと思います。
- ・不満はありません。今回のボランティアは楽しくやりました。最高の思い出だと思います。
- ・あれを借りなきゃ、あの教室をとらなきゃ、連絡しなきゃ、印刷しなきゃなどと雑務が大変多く、研究という視点でじっくり考える時間がなかったのが心残りです。

④この「高齢者PC教室」は来年以降も継続していった方が良くと思うか。継続するとすれば、どんな風に発展させていくのが良く思うか。

(学生の回答)

- ・PC教室の受付に一般の方からの問い合わせが多くあった。PC教室への興味、関心は高いと考えられる。一回で終わらせず、継続する事は大切だと思う。
- ・今回は地域ボランティア、学生ボランティアなどから細かい所まで反省点、問題点などの気づきが多く出されたと思う。カルテによって、受講者が何を理解できなかったかも把握する事が出来る。また、PCに慣れている人の操作が、初心者にとってもやりやすい操作だとは必ずしも言えない。上記のような問題点に対する改善案とあわせて、教案やテキストの修正を行う必要があると思う。
- ・継続のためには、人を集めないはずかなと思います。今回のメンバーの主力は、ほぼ後藤研で構成されていたので、主力になれるボランティアをしっかり集めないときついと思います。
- ・来年も継続したほうが良いと思います。発展に関しては、大規模にしていくと一人一人のサポートが難しくなってくると思います。何よりコミュニケーションが大事だと思うので、一緒に楽しむ場があればいいと思います。
- ・講義内容の向上はもちろんのこと、学生や大学側にもっと働きかけて規模を大きくするのが良いのではないのでしょうか。学園祭やチャリティーコンサートレベルのイベントとしても成り立つものだと思います。
- ・継続していくべきだと思います。内容面での発展は今のところうまく浮かびませんが準備の負担をうまく分散させる、という運営面での発展がまず大事だ

と思います。

- ・高齢者の方に、来年以降も絶対にやったほうが良いと何度も言われました。私もやったほうが良いと思います。デジカメ撮影は、みなが仲良くなるきっかけにもなったので、次回もやるべきだと思います。
- ・受講者の方々、学生ボランティアの両方にいい時間を持てたと思うので、来年も是非継続させて欲しいです。発展としては、学生だからこそできるようなものを一つの新しい形としてできればいいかな、と思います。
- ・受講者の方々の希望することを実現できればよいと思います。ただ、大学は同じ機種が揃っていて一見授業をやりやすように思いますが、かなり制約があるので、できる範囲は限られてくると思います。学生にもあまり負担にならない程度で、大規模にならない教室の形がよいと思います。